

JOHN FITZGERALD

ジョン・フィッツジェラルド

190cm という恵まれた体格。
HOCKEY が誇る
パワーハウス。

Zeroのアマライダーとして頭角を現し、Alien Workshopを経てジェイソン・ディル率いるFucking Awesomeの姉妹ブランドでありサイコティックなヴァイブスを醸し出すHockeyへ。身長約190cm。汗だくで狙ったテラインに野獣のような勢いで襲いかかる。ハイスピード。体当たり。危険を顧みずに突っ込んで重い音を立てながら地面にスラムする。これがジョン・フィッツジェラルドの印象。おそらく初めてこの男の名前を広く知らしめたのは2012年、AWSのオンラインビデオ企画の"Life Splicing"。巨体でディッチのウォールを高くライドし、巨大なハンドレールを攻略したかと思えばプールライディングを披露。繊細なフリップトリックもお手の物。スケーティングのスケールが大きくとてつもなく派手。その姿はHockeyのオンライン作品群でチェック。ちなみに盟友のドノヴァン・ビスコボとはともにスケートをしながら育った幼馴染。



Anthony Acosta



Heelflip

LAのダウンタウンで魅せるヒールフリップ。なだらかなバンクを利用してバリエーションとギャップを越える。スーパーラフな路面はスピードとパワーでしっかりカバー。

CHAOS

今号も集いしカオスな面々。イケイケな強豪ばかりなので誌面での露出は限られる。
若手からベテランまで、揃いも揃って癖の強いヤツばかり。
バックグラウンドは全員ばらばら、共通点はメイクしたこと。

Words by Shinsaku Arakawa, Masafumi Kajitani (P52-53, P62-65), Tomonori Taneda (P68-69)
Design: Yushi Yanagi

CHAOS

Shinsaku Arakawa



Smithgrind

一発で即キックアウトに怯んだフォトグラファーを引っ張り再トライ。2発目で再登場した警備員の目の前でメイク。In your face!

DAIKI HOSHINO

星野大喜



16歳の夏休み。初めての金髪は若さが内包する荒々しさの表れか。星野大喜は、今や標準化された「最近の若い子たちはヤバい」の代表格のひとり。日々の撮影に加え、全国各地でのデモンストレーションへの参加、同世代たちとのシューティングトリップなど、この夏もかなり積極的に動いていたようである。「最近の若い子たちは妙に忙しい…」というのも昨今の主流であり、撮影に誘い出すタイミングが難しいことが多々ある。スケーターたちを取り巻く環境の盛り上がりは、やればやるほど報われるといったものになりつつあるようにも見えるし、そうでなければならない。「モチベーションという概念は、希望と繋がってなくてはならない」by 村上 龍。

HIROKI MURAKAWA

村岡洋樹

Shinsaku Arakawa



Kickflip Shuv Hippie Jump

クイクをネクストレベルへと昇華。ヒロキの滑りの真骨頂とも言えるヒッピージャンプからのヴァリエーションは、キックフリップシャヴ。



村岡洋樹は名実ともにワールドワイドなスケーターになったと言って差し支えないだろう。フルバートをハイペースで残し続けていることには説得力しかない。欧米のスケートメディアでの彼の露出ももはや珍しいことではなくなった。VANTANスケート高校の講師を務め、長年続けてきたドローイングやカラーージュによるグラフィック表現も活動の幅を広げ続けている。昨年は結婚もメイクするなど公私に渡り順風満帆。日本のスケート界を代表するビッグネームのひとりとなった今もなお、あぐらをかくことなく次の獲物を探している。アラサーにして伸びしろがあるのは、クリエイティビティとモチベーションと日々の訓練の賜物。心技体のシンクロにて結実される世界の村岡劇場。

CHAOS

Shinsaku Arakawa

玉城和明

KAZUAKI TAMAKI



Pole Jam Backside Grab
フニャチンタイプのポールジャムにバックサイドグラブの变化球。彼にとってもはや第2の故郷とも呼べる東京は高円寺にて。



「きな粉棒選手」の愛称で知られる彼の本名は玉城和明。あだ名の知名度の方がはるかに高いスケーターのひとり。渡米した際には自ら「キナコスティックプレイヤー」と自己紹介していたという情報もあり、彼にまつわる珍話の発信源は沖縄時代からのスケートメイトの砂川元気であったりする。昨年のハロウィンには白ブリーフに脱糞という、もはや仮装とは呼べない出で立ちで混沌の渋谷をバリスケする姿が目撃されており、その前年には人種差別とシャウトされた全身黒塗りで登場。一方で、某6大学卒でVHSMAGではコラムニストとして連載を持つなど勉強のできる馬鹿。キャラの濃さが先行しがちではあるが、色モノとは呼べない確かなスキルの持ち主にして曲者。

Shinsaku Arakawa

Wallride

上井 陵との撮影のタイミングはいつも突然訪れる。「できないかもしれないです」と言いながらハイクオリティでのメイクが定番。

RYO KAMII

上井 陵



無欲というか、淡々としている。一緒に行動していてもハマるスポットがなければほとんど板を踏まずに終わる1日もある。それでもタイミングさえ合えば彼を引っ張り出したいくなるのは、単純に彼の滑りを見たいからである。ふと滑り出したときの軽いテールヒットひとつでさえ天性のものを感ずる。幼い頃から板の上にした彼のスケートキャリアは相当長い。それぞれの日々の生活の中でスケートボードが占める割合は個人により千差万別であり、それは誰にも強制されるべきものではない。それでも彼がスケートボードに近いところにいてほしいと思うし、外野が妙なお節介をするまでもなく、ちゃんと彼なりの距離感でスケートボードと向き合っている。神童と呼ばれるにはそれ相応のワケがある。

CHAOS

Shinsaku Arakawa



50-50

柔道で培われた動きをスケートボードで表現。高いところにつかり当て込む50-50。パワフルかつスタイリッシュな川崎ボーイ。

YUMA TAKEI

竹井勇磨



JIRO KAMEKO

金子次郎

前号に続き、当CHAOSに連続出場の金子次郎。また新たにいいメイクを残した結果が当記事の最終選考に残ったという至って自然な理由。やはり滑ることそのものがスケートカルチャーの軸であってほしい。スケートメディアで彼の姿を見かけるようになってもう久しい。本人によれば初めてスケート誌に掲載されたのは21歳の頃とのことなので、それから9年が経った。その間、今日に至るまで途切れることなく露出を続けている。先日公開されたBRIXTON JPのウェルカムパートをご覧ください。スポットとトリックのチョイスに金子次郎らしさが見て取れる。彼は確信を持ってスケートしている。考えを体現できるフィジカルとスキルはより凄まじさを増している。



Wallride

群馬への週末撮影遠征にて、順番待ちの列ができる集団セッション。みんなが回し系トリックでの相越えを狙う中ひとり壁を使う。



Shinsaku Arakawa

2018年現在の日本国内のスケート勢力図をあえて描くとすれば、神奈川最強説は有力なところである。長きにわたり日本屈指のスケートエリアであり続ける横浜・横須賀をはじめとし、ひとつの県内にそれぞれ多様で異なる環境と空気感を持ったエリアがいくつも存在する。湘南、逗子、港北、そして川崎。多摩川を境に東京に隣接した工業地帯のこの街のスケート環境は、県内においては決して最適とは言えない。それでもしっかり彼のようなスケーターが現れた。その背景には彼の背中を押した先輩たちや切磋琢磨してきた同世代の仲間の存在も大きかったようだ。竹井勇磨はいつの頃からか授かった「川崎ボーイ」のニックネームに恥じない、ポテンシャルの高い大器晩成のスケーターである。





Switch Nosegrind Revert

砂川元気はもはや変態的スケート職人。テールを弾いてゴリゴリ押しつけるスイッチノーズグランド。その動きは予測不可能。

Shinsaku Arakawa



撮影を目的としたスケートトリップの場合、彼は絶対的な存在になる。今回のライディングは北陸へのツアー時のものである。撮影者側の都合を正直に吐くとすれば、予算を投じて現地に赴いて万が一何も撮れなかったとなると…考えるだけで恐ろしい。限られた日数の中でできる限りの撮れ高を得て帰りたいのが本音だけれど、そう計画的にいかないのがスケートボード。あらかじめ御膳立てされたスタジオ内や風景の中で記念撮影するのは訳が違う。砂川元気の初対面スポットへの対応力はもちろんとして、兼ね備えたアイデアの豊富さは同じスポットにおいてもツアーメイトとのトリックが被らずに済むという強みもある。これが彼がオールラウンダーと呼ばれる由縁である。



砂川元気

GENKI SUNAGAWA



SHOOR WEST

ショー・ウエスト

Shinsaku Arakawa



Slob Fastplant

ショー・ウエストとこの場所に来るのは何度目だろうか？ もはやホームグラウンド化したスポットで水を得た魚のように連続メイク。



どうしても首都圏に視点が集中しがちな日本スケートシーンの中で、ショー・ウエストは北陸・金沢に拠点を置いている。立地的に決して有利と言えない日本海側から、彼は絶え間なく存在感を放っている。華のあるスケートに加えて、フットワークの軽さも大きな武器となっている。国産デッキカンパニーとして人気を誇るEvisenのこれからを担う若手筆頭として、愛車を転がしながら撮影やデモに各地を飛び回る日々。スケートをする上にさらに長距離の移動となれば心身ともに過酷なときもあるはずだが、持ち前の穏やかさと前向きさでスケートライフを満喫しているようだ。特筆すべきなのは、トランジションが大好物ではあるが、ストリートもいける口だってこと。



DONOVON PISCOPO

ドノヴァン・ピスコポ

洗練された身のこなし。
プッシュひとつとっても華がある。

デビューは2009年。ともに育ったジョン・フィッツジェラルドと同じくZeroでキャリアをスタートさせ「Strange World」に数カット出演。クレイルスライド、バックリップのフロント180アウトといったセンスあふれるトリックを披露。当時はまだ十代半ば。その若さで現在の完成されたスケートスタイルの片鱗を見せている。その後、幼馴染とともにAlien Workshopに移籍し、現在もNike SB、Hockeyと同じブランドに所属。ドノヴァン・ピスコポの武器はなんと言っても洗練された身のこなし。プッシュひとつとっても華がある。切れのあるトリック捌きも特筆すべき点。父親は'80年代に活動したスケーターで地元LAはコヴィーナという街でPawnというスケートショップを営んでいる。幼少期から当時のSanta Cruzの作品群を親で育ったというだけあり、十代からスタイルが洗練されていたのも納得できる。



CHAOS

Anthony Acosta



Front Hurricane

やはりこの男には仲間とコンクリートを盛ったDIYスポットがふさわしい。LAの某スポット、タイトなウォールのリップで仕留めるフロントハリケーン。



RANEY BERES

レイニー・ベレス

死の淵から舞い戻った
**Antihero が誇る
ヘッシュの申し子。**

DIYパークのラフなコンクリートランジションを猛チャージ。ゴリゴリと音を立ててコーピングを削り、荒々しくぶっ飛び、インヴァートやファーストプラントで魅せる。まさにAntiheroが誇るヘッシュの申し子、レイニー・ベレス。この男を語る上で欠かせないのは不屈のメンタリティ。攻撃的なスケータリングはレイニーのフッテージを見れば一目瞭然だが、それに伴い不本意な報いを受けることも。これまでに頭から流血して顔が血まみれになることもしばしば。2015年に敢行されたAntiheroのイスラエルツアーでは頭蓋骨を割って昏睡状態に。路上で横たわったまま息が止まったのだが、チームメイトの迅速な対応によって命を取り留め脳の手術を受けることに。このような苦境を乗り越えシーンに復活し、今なお勢いを緩めることなくアグレッシブなスケータリングで魅せている。Antihero、Spitfire、Converseなど、最近の映像作品に収録された彼のフッテージが壮絶な怪我を経て撮影されたことを知ると、その凄さがまたひととき伝わらるだろう。



CHAOS

Shinsaku Arakawa



Switch Nosegrind

スイッチまで及ぶ戸倉万汰郎の驚異のバネ。まさに健康優良不良少年。兵庫が輩出したニュージェネレーションの異端児。

戸倉万汰郎

MANITARO TOKURA



英国を代表するデッキカンパニー、Isleのフロウチームに所属する飯田泰彦。彼もまた神奈川県のスケーターであり、内陸部に位置する厚木市で生まれ育った。佐川海斗らを始めとする同世代のスケーターで構成されたクルー、The Peaceの一員でもある。クルーの名にふさわしく穏やかで優しい人柄に加えて、スケートボードへの積極的な姿勢が清々しいナイスガイ。過去2回のロンドン滞在時にはニック・ジェンセンら本国のライダーたちとのセッションも経験してきた。その濃厚なスケートライフの一方で、大学に通い学業にも励むという多忙な日々を送っている。現在は3度目の渡英に向けて準備中とのこと。きっとまた、実りのある旅になるはず。



Shinsaku Arakawa



飯田泰彦

YASUHIKO IIDA



Tailgrab Crooks

アテのないスポットシーク中に突如出現した角ハンドレール。変則的なテールグラブで彼なりの魅せ方を表現する飯田泰彦。



飄々としつつも勢いがある。「爆発的」という言葉がよく似合う。いま注目を集めるティーン勢の中でも一際スタイルの濃厚なスケーターのひとり。パワフルなポップから繰り出される、高くバチバチのトリックにイワされる。トリックやスポットへのこだわりも強く、独特でありつつハイレベルなセレクトで確実に喰らわせてくる。ピンと来ない物事にはそうやすやすとは乗らないような、意思の強さも垣間見える。その一癖ある人柄も面白い。中学卒業後、上京。スケートハウスでの共同生活を経て、現在は一人暮らしの環境を自らの力で得た。現在18歳。喜怒哀楽がひとときわ多いであろう東京での経験値は、きっと今後の彼のスケートライフにより一層の深みを与えるものとなる。

CHAOS

Tomonori Taneda

TAIHOU TOKURA

戸倉大鳳

「いままでどおり、みんなで滑って、
撮影してっていう動きをこれからは
アメリカでもしていきたい」

最近ではスポンサーも増えたり変わったり、取り巻く環境が変化して行く中で、自分がやるべきことと成すべきことをしっかり考えている。それは大会だけではなく、さまざまなイベントに呼ばれて滑りに行ったり、映像や写真を残したり、考えたことを能動的に行動に移している証拠だと思う。みんな大鳳の滑りが見たい。大鳳が滑れば盛り上がる。みんな大鳳が好きだ。上手いスケーターは多かれど、この感情を抱かせられるスケーターは一握り。その才能が大鳳にはある。まだ、15歳。もう、15歳。「いままでどおり、みんなで滑って、撮影してっていう動きをこれからはアメリカでもしていきたい」。大鳳らしさ、いまこれからも、自分を信じてこのまま突き進んでほしい。



Olite to Wall

着地のパンクも荒くてガタガタ。ミスればあちこちズル割け
必至。持ち前のノリとスーパースキルで難スポットを退治。

KAITO SAGAWA

佐川海斗

佐川海斗のパートを観る時、
時代が大きく動き出した
ことを感じる

「日本人スケーターは結局欧米のスケーターには敵わない」なんてもはや過去の言葉となった。今、佐川海斗のパートを観るとき、時代が大きく動き出したと感じる。海外のトッププロのフッターと比べても遜色ないスキルとクオリティ。幼い頃からの練習量が今、見事に花開いている。加えて、ただスケートが上手いだけではない。「魅せる」ということにもちゃんと意識を置いている。これは最近の若者たちに共通する傾向とも言える。日本にいる時間の方がもはや短いのではという印象すら受ける。海外でのツアーやコンテストへの参加のため忙しく飛び回っている。つい先日始動したConverse Skateboardingでの活動にも期待がかかる。動けば動いた分、きっと形になっていく。



Backtail

足の怪我による不調の中でのチェストハイのバックテール。千鳥足のオジサンたちが行き交う花金の夜、高架下に響く快音。

CHAOS

Shinsaku Arakawa

